

松阪市子ども支援研究センターだより

E-mail:kyo.div@city.matsusaka.mie.jp <http://www.city.matsusaka.mie.jp>

松阪教育支援センター「鈴の森教室」TEL 26-1900 FAX 26-1901 E-mail: suzunomori@matsusaka.ed.jp

松阪教育支援センター「うれしの教室」TEL 42-7374 FAX 42-4568 E-mail: uresino-k@matsusaka.ed.jp

～年度の終わりに…新しい春を思いつつ。～

最近話題となっている「アドラー心理学」という心理学の分野があります。「嫌われる勇氣」（岸見一郎 古賀史健 著、ダイヤモンド社）という本が評判になりましたので、ご存じの方も多いのではないのでしょうか。子ども支援研究センターでも、新刊本として購入しましたので、よろしければぜひどうぞ。

アドラー心理学は、別名「勇氣の心理学」と言われ、「勇氣づけ」というキーワードで語られるその考え方は、教育界でも重要な視点として注目されています。昨今、関連本も、教育分野や自己啓発分野で次々に出版されているようです。

「嫌われる勇氣」を読んでいて、その中に出てきた「ここに存在しているだけで、価値がある。」という言葉が、この季節と重なって、心に残っています。年度の節目、少し寂しい別れと、新しい出会いの季節です。わくわくするような気持ちもちろんですが、子どもたちの中には、不安の方を強く感じている子どもも多くいるのではないかと思います。

そんなとき、「君はそこにいていいんだよ。」というメッセージを、われわれ大人は、どれだけ子どもたちに送れているでしょうか。多忙な日々ではありますが、どんな子どもでも、また、誰でも、そこにいることが大切で、それだけですばらしいのだ、ということが、価値として教室で共有されているのでしょうか。学校へ行きにくくなる子どもたちに、そのメッセージがうまく伝われば、と思うことも多くあります。その子のできることを見つける、探す、鍛える、という観点だけでなく、まずそこにいる、というだけですばらしい、という価値が共有できるか、ということをおもいます。

谷川俊太郎さんの「生きる」という有名な詩があります。全ての連が「生きているということ／今生きているということ」という二行から始まり、何気ないことの大切さがしみじみ伝わってくる気がします。スペースや著作権等の課題もあり、全文を載せることはできませんが、この詩のように、何気ないことを慈しみ、大切にできる1年であったか、また、来年度をそういう1年にしていけるか。そういうことを思いながら、年度の終わりを迎えています。

最後になりましたが、この一年、子ども支援研究センターの活動にご協力、ご支援をいただき、本当にありがとうございました。平成28年度事業も、より充実した内容でご提供できるよう計画、準備を進めています。ぜひ活用していただき、子どもたちの豊かな学びや、心の成長につなげていくことのお手伝いができれば本当にうれしく思います。どうぞよろしく願いいたします。

最後までセンターだよりをお読みいただき、ありがとうございました。（楠堂 晶久）

社会科副読本編集委員会より ～お知らせ～

第五小学校 岡村哲行先生より郷土の歴史にかかわる地域教材資料をご提供いただきました。この資料は、社会科副読本編集委員会にて保管していますので、閲覧および貸し出しを希望される方は下記事務局までご連絡ください。

松阪市社会科副読本編集委員会事務局（松阪市子ども支援研究センター内）

電話：0598-26-1900

* 子支研 研究集録をご活用ください *

市内の小学校のご協力のもと、2人の長期研修員が研究したものをまとめた研究集録を、各園・学校に送付させていただきます。どうぞご活用ください。
(当センターに予備がありますので、個人的に必要な方はご連絡ください。)

教育の情報化に向けた授業づくり

—タブレット端末を活用した、数学科の協働的な学びを通して—

研究集録 第129集
(長期研修員 脇本 慎太郎)

近年の急速な社会の情報化に伴い、膨大な情報の中から自ら進んで課題を見付け、情報を収集し、判断して問題解決を図ることができる生徒の育成が求められています。松阪市においても、中学校3校で生徒一人1台のタブレット端末をはじめとする、学習環境が整備されました。

本研究では、このうちの2校に協力を依頼し、タブレット端末がもつ機能や特長を活かした学習活動や、学習場面を指導計画の中に設定することを研究の手立てとして、「思考力」「表現力」育成をめざし中学校数学科の授業づくりの研究を行いました。協働的な学びの中で生徒がタブレット端末を活用し、自らの思考を可視化し、他者と情報を共有する。このような実践を通じて、数学について本質的な意味を深く思考することや、過程や結果に至る根拠を自分の言葉で表現することについてまとめました。それぞれの学校で、指導資料の一つとして活用していただければ幸いです。

「単元を貫く言語活動」を位置付けた国語科の授業づくり

—主体的に学ぶ言語活動の充実をめざして—

研究集録 第130集
(長期研修員 津畑 哲哉)

児童を取り巻く環境は大きく変化しています。様々な思いや考えを持つ他者と対話をしたり、わが国の文化的伝統の中で形成されてきた豊かな言語文化に親しんだりするなどの機会が増加していくことが予想されます。こうした時代を生き抜く児童にとって必要な資質・能力を育むために、言葉に対する感性を一層磨き、言語生活を豊かにすることが求められています。

本研究では、「単元を貫く言語活動」を位置付けた国語科の授業づくりにおいて、主体的に学ぶ言語活動の充実に向けた研究を、授業実践をもとにして進めてきました。市内の小学校2校において、実生活で生きてはたらく国語の力を付けるために、文章の内容を理解させるだけでなく、児童一人ひとりがより主体的に文章に向き合う力を付ける実践を行いました。前期は、第5学年「千年の釘にいどむ」の学習において、「ポップを使ってお薦めの一冊を友だちに紹介する活動」を、後期は第4学年「ごんぎつね」の学習において、「南吉新聞を作ってお気に入りの物語を紹介する活動」を単元を貫く言語活動として位置付けました。児童に付ける力を明確化し、児童が主体的に学ぶ言語活動の充実をめざした授業実践をし、実践事例として本研究を通して示しました。それぞれの学校で、指導資料の一つとして活用していただければ幸いです。